

ルワンダ 難民の消長 - 難民発生 の 定量的分析 -

01204060 防衛庁

*齋藤 司郎 SAITO shiro

はじめに

1994年7月17日、大量のルワンダ難民がゴマに殺到した。この難民発生の様相は、7月25日から福岡で開かれたAPORS'94で、スイス国防大学のAlbert A. Stahel 氏らが発表した「旧ユーゴスラビア内戦のマクロシミュレーション」¹⁾の中で難民発生率を一定の週当り1%としていたのとは全く異なっていた。本稿は、ルワンダ難民の事例をとりあげ、難民数の増減に成長曲線の適用を試み、妥当な値が得られたので、未だ分析不十分ではあるが報告する。

1 難民の現状

(1) 難民の定義と認定

難民の認定は、難民条約に基づき各国が国内法により判断している。難民条約では、難民を政治的、人種的、宗教的迫害から、国を離れざるをえない人と定め、難民同様、住んでいる町、村を離れざるをえなくても、国境を越えていない人は避難民としている。したがって、避難民、経済難民、移民、移動等は難民と認めていないため、難民の識別が問題となっている。世界には2,300万人の難民と2,500万人の避難民がいる。これは実に130人に1人である。

(2) UNHCR (国連難民高等弁務事務所)の活動

当事務所は、高等弁務官事務方貞子氏以下職員数約5,000人からなり、難民の保護と支援、及び、難民の解決を任務としている。難民の解決方法としては、庇護を与える隣国に同化定住させる、第3国に定住できるように斡旋する、自分の国に帰還させる等がある。

(3) 難民発生の原因

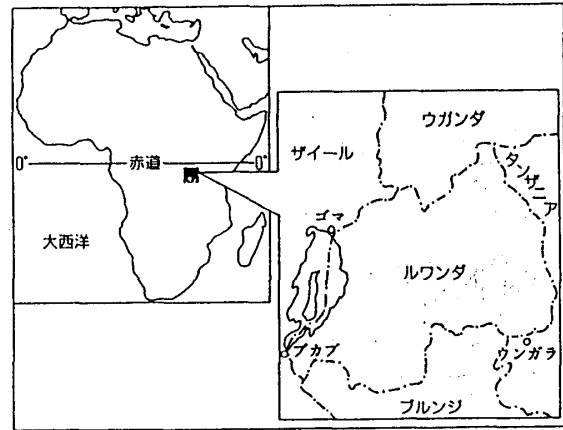
大量難民発生 の 主な原因は紛争である。紛争の原因は政治的、経済的利益のためであり、指導者が民族対立の側面を強調し民族紛争に転嫁するため、民族浄化、虐殺を招いている。また、国際的機関が難民の保護に力を入れ、これに頼る難民も増えている。

難民発生 の 直接の原因としては「殺される」「家を焼かれる」と思い逃げる人が増えている。

2 ルワンダの概要

(1) ルワンダの地理

アフリカ中央部に位置し、面積は四国の1.4倍、首都キガリでも標高1,000m以上の高地である。アフリカ最大の人口密集地であり、食糧確保が最大の課題となっている。



(2) ルワンダの歴史

ハム系ツチ族、バンツ系ツツ族の部族間抗争の歴史は、概略次のとおりである。

ルワンダの歴史

居住民	1994年7月17-18日		
10世紀頃	森林民族/バンツ系ツツ族が流入		ツツ族
15世紀頃	森林系ハム系ツチ族	ツツ族	ツツ族
言語	スワヒリ語	キナルワンダ語	?
17世紀頃	ツチ族の王国 (ツチ族がツツ族を支配)		
1899年	ドイツ保護領 (ツチ族の王を通じて間接統治)		
宗教 (宣教師流入)	カトリック 4.5%	イスラム 1.5% - その他 9%	原始宗教 4.5%
1919年	ドイツ敗戦によりベルギー委任統治 (ツチ族の王を通じての間接統治を増強)		
1962年	ルワンダ共和国独立 (ツチ族革命、ツツ族の大規模、公川朗フランス助)		
内戦 (62-93)	ルワンダ愛国戦線	ルワンダ共和国軍 (フランスが介入ツツ族を支援)	
1993年	人口約820万人	ハム系ツチ族 10% (82万人)	バンツ系ツツ族 89.5% (734万人) 0.5% (4万人)
1994年4月	7月ツチ族新政府樹立	ツツ族による虐殺・戦死等	ツツ族難民化 他国に渡出; 国内の難民
5月ツチ族難民	40万人	100万人	ツツ族ツツ族 難民住民
7月ツチ族新政府	40万人	100万人	210万人; 150万人
7月ツチ族大規模難民	7月ツチ族大規模難民		
コレラ等の蔓延 (最悪時死亡率4%)	ゴマ	797	927; 797; 927
8月仏軍安全地帯設置に伴う難民	100%	30%	10%; 35%; 31%; 1%

3 成長曲線の原理

t年における人口をx, 年あたりの人口増加は現在の人口に比例すると仮定し、

$$\frac{dx}{dt} = c x \quad (1)$$

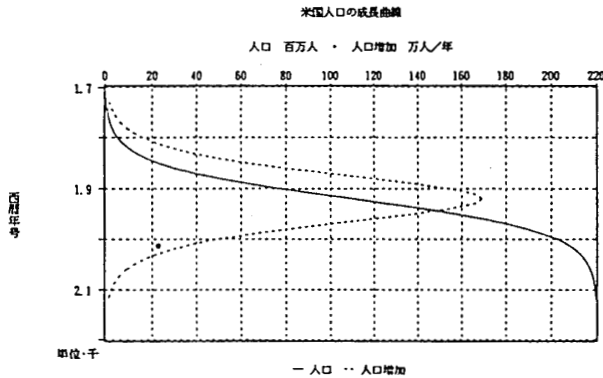
増加係数cは人口xの減少関数として、

$$c = a - b x \quad (2)$$

(1) (2) の解は、

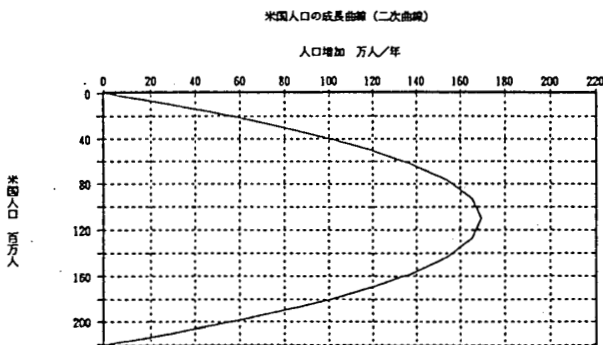
$$x = \frac{a/b}{1 + \exp\{-a(t - t_0)\}} \quad (3)$$

米国の人口の推移は、 $t_0 = 1920$ 年、 $a = 0.0308$ 、 $a/b = 220$ 万人として、次のグラフのようになる。



また、(1) (2)は単純な二次方程式となる。

$$\frac{dx}{dt} = (a - b x) x$$



したがって、原点と2点のデータがあれば係数a、bが計算でき、(3)から2点のデータを用いて求めた t_0 の値が一致すれば、これらのパラメータにより唯一の成長曲線が求まり、これから時刻しに必ず成成長量xを推定できる。

4 成長曲線の適用

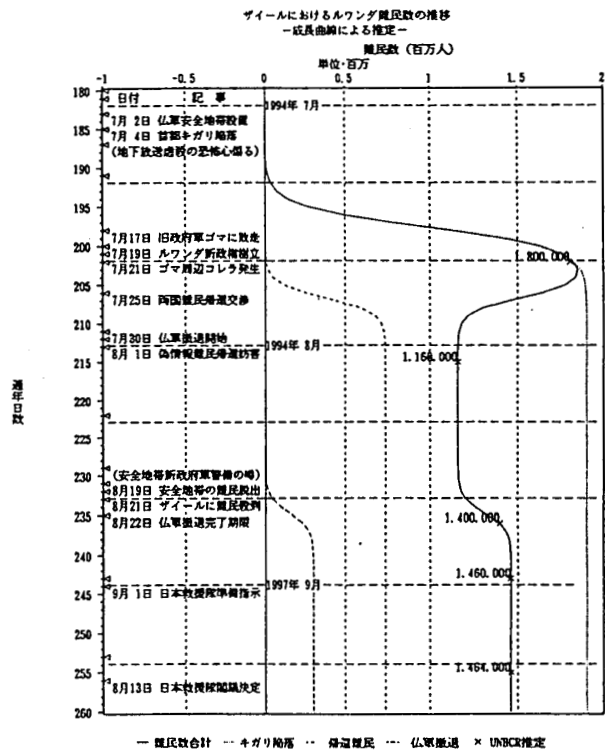
1994年7～8月にザイルに流入した難民の増減について、不完全ながらも次のデータを得た。

段階	キガリ陥落	帰還難民	仏軍撤退
t_1	7月14日	7月22日	8月18日
dx/dt	180,000	16,000	3,000
x_1	300,000	16,000	3,000
t_2	7月19日	8月1日	8月20日
dx/dt	180,000	1,000	14,400
x_2	1,600,000	740,000	15,000

これらから成長曲線のパラメータを求めると、

t_0	7月16日	7月25日	8月22日
a	0.7125000	1.0220695	1.0100000
a/b	1,900,000	740,979	303,000

これを、主要な記事と対比させ成長曲線で表す。



この分析結果は、後にUNHCRが発表した難民の推定値とも一致しており妥当な結果と考える。

難民発生の原因としては「殺される」「家を焼かれる」と思い逃げる人が多いことが分る。

おわりに

本事例は特異ではあるが、分析価値のある問題の本質を包含している。本稿の分析は不十分であり、これを機に、この種の論議が高まれば幸いである。

参考文献

[1]Albelt A. Stahel, Cedric Dupont, Simon Ilug and Daniel Schneider: The war in former Yugoslavia, APORS '94 ABSTRACTS pp. 278